

1月号(当シリーズ第76回)「鍛えて最強行政医をつくる」で、山口亮先生による坂路調教で鍛えられている3頭の競走馬のうち一人、札幌市白石保健センターの寺田健作と申します。3月号(第78回)と6月号(第81回)に札幌市の他2人の若手行政医が執筆しており、今回がその3人の締めくくりになります。

### はじめに

山口亮先生の1月号「鍛えて最強行政医をつくる」では、私たち札幌市の若手行政医は馬に例えられていましたが、山口先生の口癖に「行政医は蟬によく例えられる」というものがあります。札幌市に入職して約1年半、山口先生とは職場も違いますが、すでに5回以上は耳にしており、私の中のキーワードになりつつあります。

### 行政医になるまで

私は自分自身が子どもであった小学校中学年頃から、小さな子どもです。また「札幌市乳幼児健診診察マニュアル」の改訂にも携わっており、札幌市の他の医師職や保健所、他機関の先生との関わりの中で、行政としてできることを学んでいます。

2つ目は、児童精神科(札幌市子ども心身医療センター)での業務です。乳幼児健診をしていると、有効な評価と判断のためには、児の発達段階や発達特性の理解がとても重要な位置にあることを痛感しました。短い健診の場が、母子へのサポートの有効な手掛かりの一つとなるためには、子どもの発達課題やわが子に向き合う親の心情、社会のサポート体制等についての理解が重要と感じ、行政2年目である令和元年度から札幌市子ども心身医療センターの児童精神科で勉強をさせていただいています。こちらでも児童精神科の先生や心理士など、多くの方々からとても優しく、細やかなご指導をいただいております。現在乳幼児に関わる事が多いのですが、学童期、思春期への問題とも連続してつながっており、

もが好きで、小児科に憧れて医学を志しました。初期臨床研修医時代には、とてもハードな生活の中でもありましたが、最終的には幼少期からの夢であった小児科に進むため、母校の小児科学講座へ入局しました。広大な北海道に点在する地域での臨床生活では、ライフ・ワーク・バランスは、ワーク・ワーク・アンバランスとなっていました。当時の生活に疑問を持つことすらありませんでした。そのような中、わが子が生まれ、孤軍奮闘する妻を横目に見ながら他人の子どもの面倒ばかりを見て

さらなる学習や経験が必要だと感じています。

3つ目は、札幌市の産業医としての業務です。現在は担当事業場の安全衛生委員会への出席や、長時間勤務職員に対する面接を中心に行っていますが、これまでの臨床の経験を直接的に生かせる場面がほとんどなく、学ばなければならぬ課題が山積の状況です。産業保健分野は、社会医学系専攻医においても基本プログラムに組み込まれている重要な分野ですので、山積の課題を一つずつ解決していきたいです。

4つ目は、社会医学系専攻医としての業務です。この業務の一環として、2週間に1回の山口先生とのスパルタセミナーがあり、その中で公衆衛生分野の幅広い知識や行政医としての姿勢を教えていただいています。また同セミナーを通して、2018年1月から五類感染症(全数把握疾患)となった百日咳の、札幌市における発生动向を継続的にまとめており、外に向けた発信についても経験させていただいています。これらの4つの主な業務は、現

いる日々疑問を感じ始めました。

ちょうど同じ頃、大学時代からの同期で、同門の小児科医としても同じように精進してきた古澤弥先生(当シリーズ第78回)が行政に入ったことで、恥ずかしながら初めて行政医という存在を知りました。札幌市では小児科をバックグラウンドとした行政医が比較的多く働いており、乳幼児健診や保健師との母子保健業務に生かしているという話を聞き、またその当時、出産前からハイリスクな家庭をフォローし、出産後も小児科が関わって見守ることに積極的に取り組んでいた医療機関に勤務していたこともあり、行政医に興味を持つようになりました。

転職に当たっては多くの葛藤と多くの人との対話を要しましたが、最終的には家族で納得して転職することにしました。

時点では直接的にはつながることはあまりなく、対象とする方や一緒に働く方もまったく違いですが、その分多くの分野の知識を学び、広い視野を持ち、多くの方と接点を持てる機会になるのではないかと考えています。

### 今後について

冒頭の山口先生がおっしゃる行政医と蟬との関係性ですが、蟬の幼虫(若手行政医)は長年地中に潜り、時が来るのをじっと待ち、蟬としての人生最後の1週間に羽化し、自由を得るといふ点が行政医の役所生活に似ているというものです。成虫になれる幼虫は一部に限られ、長年の幼虫生活を終えて地上に出ようとしたり、地表がコンクリートで固められていた場合もあることや、蟬の種類によって地中生活の長さが全然違うということも類似点の一つのようです。そのような場合に対処する方法として、コンクリートを破壊できるような強靱な顎や鎌を持つのも一つの手段かもしれません。しかし残念ながら私がそのような顎や鎌を持ち合わせているようには思

### 現在の業務

現在の配属先は、札幌市の全10区のおのにおのにある保健センターで、主に次の4つの業務をさせていただいています。

1つ目は、乳幼児健診を中心とした母子保健に関する業務です。小児科臨床医時代にも乳幼児健診に従事することは少々ありましたが、診察ではどうしても身体面のチェックに偏りがちになり、母子関係の構築や子どもの精神発達、ましてや地域の保健師と母との関係性やフォローなどについては、理解が不十分でした。入庁後は、保健センターの上司である坂井多恵子先生(小児科医)を中心に、保健師など多くの職種の方々から、保健師や保健センターの役割、行政としてできることや逆に医療機関とは違って難しいことなどを優しく教えていただいています。

えないため、現在の幼虫の段階から、たくさん種類の木の汁を吸い(多くの分野の知識を学び)、地表の状況に気を配り(広い視野を持ち)、同じ蟬の幼虫にとどまらず、ミミズやモグラも含めた多くの異種と知り合いになり(同種・異職種を含めた知人を大切に)、コンクリートで固められそうな時には事前に察知し、場所を変えられ(若手行政医は長年地中に潜り、時が来るのをじっと待ち、蟬としての人生最後の1週間に羽化し、自由を得るといふ点が行政医の役所生活に似ているというものです。成虫になれる幼虫は一部に限られ、長年の幼虫生活を終えて地上に出ようとしたり、地表がコンクリートで固められていた場合もあることや、蟬の種類によって地中生活の長さが全然違うということも類似点の一つのようです。そのような場合に対処する方法として、コンクリートを破壊できるような強靱な顎や鎌を持つのも一つの手段かもしれません。しかし残念ながら私がそのような顎や鎌を持ち合わせているようには思

今後、どのような幼虫生活が待ち構えているかは分かりませんが、現在の未熟な私を温かく見守り続けてくださっている周囲の皆さま、そして今後お目にかかる皆さまにおかれましては、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



札幌市白石区  
保健福祉部健康・  
子ども課健やか推進係  
寺田 健作

平成23年北海道大学卒業。初期臨床研修修了後、同大小児科学講座に入局し、北海道内の地方病院で勤務。平成30年札幌市入職、同年より現職。小児科専門医。日本医師会認定産業医。